

鍋田恭孝先生の定年ご退職にあたって

臨床心理学専攻主任 林 もも子

鍋田先生は、1947年生まれ、1973年に慶応義塾大学医学部を卒業、同大学精神神経科にて精神分析的な精神療法のトレーニングを受けながら、精神病理学の臨床研究に従事された。医学博士、認定臨床心理士、精神療法学会常任理事、集団精神療法学会認定スーパーバイザーの資格をお持ちである。

鍋田先生は1976年慶応義塾大学医学部精神科助手、講師を経て1984年宇都宮大学保健管理センター助教授、1987年藤田学園保健衛生大学医学部講師、1993年防衛医科大学講師、として医師を対象として臨床と指導を行なってこられた。各大学病院では、思春期専門外来、心身症専門外来、精神療法専門外来を担当され、特に、対人恐怖、うつ病、ひきこもり治療の専門家として高い評価を得てこられた。

また、1987年より、故霜山徳爾先生と共に、「青山心理カウンセリングセンター」を立ち上げられ、臨床の場を作られると共に、心理臨床家を養成する機関として「青山心理臨床教育センター」を併設されて心理臨床家の育成につとめられた。さらに、不登校やひきこもりの子どもたちの治療的、成長促進の場として、「NPO法人、青山心理グロウイングスペース」を立ち上げ、さらに、渋谷駅前に、「青山渋谷メディカルクリニック」を開業され、質の高い臨床の提供に心を砕いてこられた。不登校やひきこもりの子どもたちの居場所、フリースクールなどが乱立する中で、鍋田先生が熟考された理論に裏付けられ、周到な準備と優れたスタッフを集めて作られたフリースペースをはじめとするカウンセリングセンターやクリニックは、質の高いサービスを提供していることで知られている。

一方、鍋田先生は、1997年、大正大学人間学部および大学院教授（臨床心理学専門課程）に就任され、臨床心理士養成大学院において、臨床心理士をめざす学生たちの教育に従事されるようになった。そして、2006年度より、立教大学現代心理学部心理学科および大学院教授（臨床心理学

専攻）に就任された。

立教大学では、その講義の中で、臨床経験に裏付けられたユニークな精神病理についての知見と治療のコツを学生に惜しみなく伝えられ、学生たちはその自由闊達な語りから伝わってくる臨床の現場のエッセンスを喜んで吸収していた。あふれるような臨床の知恵に直接ふれた学生たちは、胸を躍らせる思いで現場に入る心構えを作っていたようである。また、鍋田先生が主催されるフリースペースに実習として参加する幸運を得た学生たちは、貴重な現場経験と鍋田先生やその周辺のスタッフによるスーパービジョンにより、臨床家として大きな成長を遂げた。

鍋田先生は大学という教育の場に加えて臨床の現場も精力的に運営し、かつ、治療活動が続けてこられた。時に、疲れていらっしゃるように見えることもあったが、不死鳥のように復活してまた新たな地平に挑戦していかれる鍋田先生の姿は、学生たちにとっても大変刺激的なものだったようである。衰えることのない好奇心と新しいことに挑戦しつづける鍋田先生の若さは年齢を感じさせないものだった。

このような激務のかたわら、執筆活動も積極的になさって、広く一般の人や精神療法を学ぶ人に鍋田先生の広い知見を伝えてくださっている。主要なご著書としては、「対人恐怖・醜形恐怖」（金剛出版）、「心理療法を学ぶ」（編集、共著、有斐閣）、「心理療法のできること・できないこと」（編集、共著、日本評論社）、「思春期臨床の考え方・すすめ方— 新たな視点・新たなアプローチ」（金剛出版）、「身体醜形障害— なぜ美醜にとらわれてしまうのか」（単著、講談社）、「変わりゆく思春期の心理と病理— 物語れない・生き方がわからない若者たち」（単著、日本評論社）、「うつ病がよくわかる本」（単著、日本評論社）などがある。

鍋田先生は、現在も新たな本を執筆中とのことであり、大変楽しみである。お元気で活躍を続けられることを祈ってやまない。